

原稿校了後の前兆変化について

ハヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254  
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.1778 近畿圏大型地殻地震の可能性前兆 続報

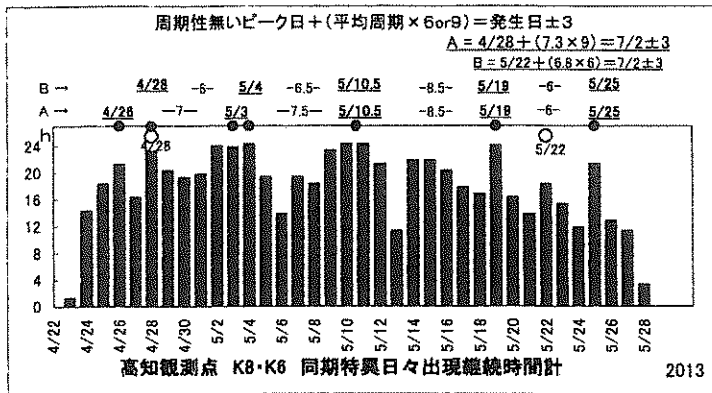


図-1) 高知観測点K6・K8 同期特異日々出現継続時間計

4/23から継続出現しだした高知観測点のK6とK8の(時間的同期)糸状特異状態の日々の出現継続時間計グラフです。現在までの出現状況で、長時間出現日に●印をつけてみますと左グラフの上●のとおりとなり、平均7.3又は6.8の周期性が見えます。前半のピークの取り方で、2種類の周期性と周期性の無いピークが取れますので、一応2種記してあります。基線幅増大BTの周期性変化経験則: 周期性無いピークに平均周期の6倍値又は9倍値を加算すると発生日±3となる経験則を使用して見てみますと、どちらからでも、7月2日±3が計算できます。但し、この認識が正しいか否かは断定困難。本日は特異無く正常。

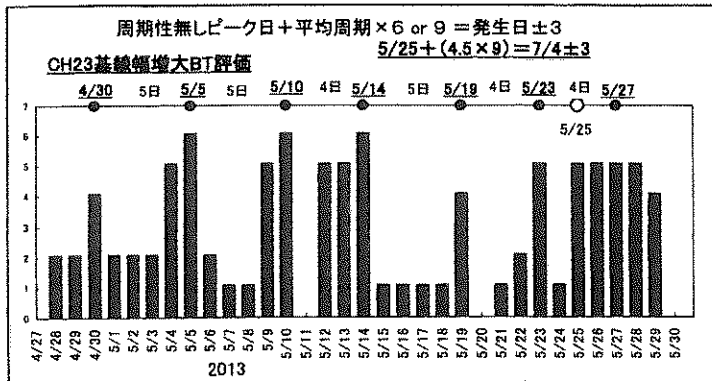


図-2) CH23 基線幅増大BT 周期性変化

4/28から継続出現しだしたハヶ岳のCH23の基線幅増大BT変化評価グラフです。終息傾向の可能性がありましたが、継続認識。BTのピーク認識は基線の太さよりも、長時間継続がピーク認識となります。5/5, 5/10, 5/14のピークは全て基線が糸状態となる変化日です。他は長時間基線が太い日。但し5/25~28期間は殆ど差が無く、ピーク認識が不確かです。一応周期性が見えますので、5/25を周期性の無いピークとしますと、左記のとおり、7月4日±3が計算できます。現在の後半の評価は不確かですので、今後の変化で修正の可能性もあります。

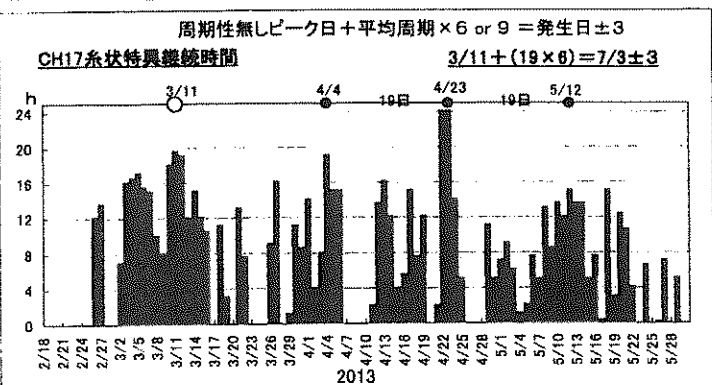


図-3) CH17 糸状特異日々出現継続時間計

4/26より顕著に継続出現するようになったハヶ岳のCH17の糸状特異状態の日々の出現継続時間計グラフです。小ピークは沢山見えますが、大きく見ますと複数のブロックに別れて出現している様に見えます。この各中心時期付近にある長時間出現日をピークととりますと、左記のとおり19日間隔が見えます。最初のピーク3/11からは間隔24日となるため、3/11を周期性の無いピークとし、BT周期性経験則を使用しますと、6倍値使用で、他と同様な時期=7月3日±3が計算されます。今後まだ継続する可能性有。今後を観測し、更に検討・修正致します。

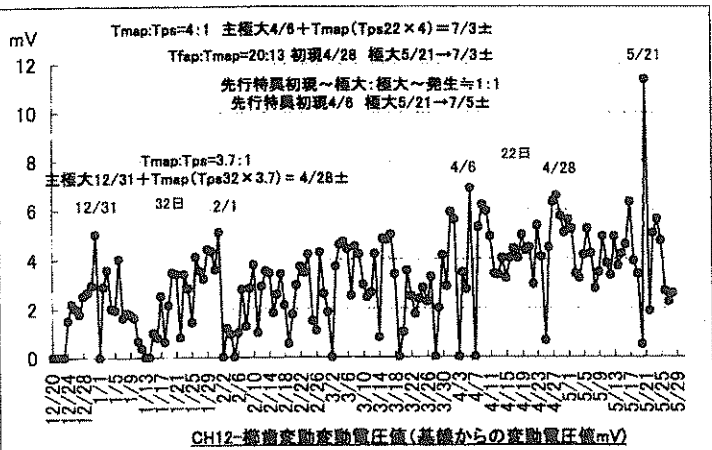


図-4) CH12 櫛歯前兆変動値変化

ハヶ岳のCH12の基線から櫛歯状に突出する地殻地震特有の前兆変動の変動値変化グラフです。4/6と4/28のピークを主副極大経験則(主極大~副極大=Tps 主極大~発生=Tmapとした時 Tmap:Tps=4:1経験則[副極大が緩やかな場合])と認識し、7/3±発生の可能性と考えておりましたが、5/21に最大変動値が出現観測されました。4/6, 4/28もピークに見えますため、5/21極大は異質に見え、どう認識理解したら良いか判りかねます。ちなみに5/21極大に対し、4/6を先行特異初現、4/28を前兆初現と仮定しますと、偶然にも全て同じ時期=7月3日±又は5日±が計算されました。但し、これらの認識は偶然である可能性がありますので、あくまでも参考です。今後の変化を見て、更に修正します。

原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254  
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.1778 近畿圏大型地殻地震の可能性前兆 続報

No.1778長期継続特殊前兆の続報。

前頁には4/28極大認識のステージ5前兆群の中で、継続的に出現している前兆に周期性変化が認識できるものを複数掲載。

多くの周期性変化に使用した経験則は、元々は基線幅増大BTの周期性変化(極大付近~静穏化迄継続)経験則で、周期性の無い小ピーク日に平均周期間隔日数の6倍値又は9倍値を加算すると発生日±3となる経験則です。

過去の観測例では基線幅増大BTの変化の中に、基線が糸になる特異状態が混在したケースもあったため、基線幅増大BTと基線が糸状となる特異状態とは、変動形態は全く異なりますが、現象としては同様なものである可能性が示唆されます。そのため、特異状態の変化にも周期性が見えた場合、BTの周期性変化経験則を使用してみた次第です。これが正しいか否かは不明です。また今回の各周期の取り方・周期性の無いピーク日認識も現認識で正しいか否か断定も困難です。今後の観測と検討で修正される可能性もあり得ます。

但し、偶然かもしれませんが、今回示した認識では全て同様な時期が計算されます。右図(6)は複数の前兆関係から現在認識が仮に正しい場合での、各推定発生時期を誤差を含めて図示したものです。現認識でのステージ5前兆から示される時期は、7月3日±2(7月1~5日期间)です。この時期に対応地震発生となるのか、又は次の前兆群(ステージ6)に移行して、発生は更に先の時期となるのかは、4/28極大に対し、7/3±発生仮定の場合6/17±に前兆終息が認められるかで判断されます。6/17±終息が計算されますが、5/21のCH12櫛歯極大に対しては、6/22±終息が計算されます。今後極大が出現しなければ、6月下旬時点で前兆が全て終息すれば、7月3日±2発生の可能性が示唆されることとなります。ステージ5に入ってから一ヶ月経過、極大がひとつであることから、早い場合に発生となるか、次ステージへ移行するか注意して観測続行。

- 推定領域=右A図斜線領域  
右B図斜線域=参考領域
- 推定規模=M7.9±0.5  
(震源浅い陸域地殻地震)
- 推定時期=
  - ①早い場合=7月3日±2  
(但し6/17±, 22± 前兆終息が観測された場合に限る)
  - ②遅い場合=今後の観測による変化を鑑みて今後推定

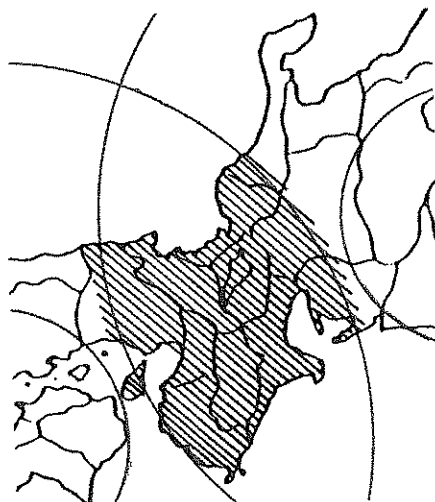
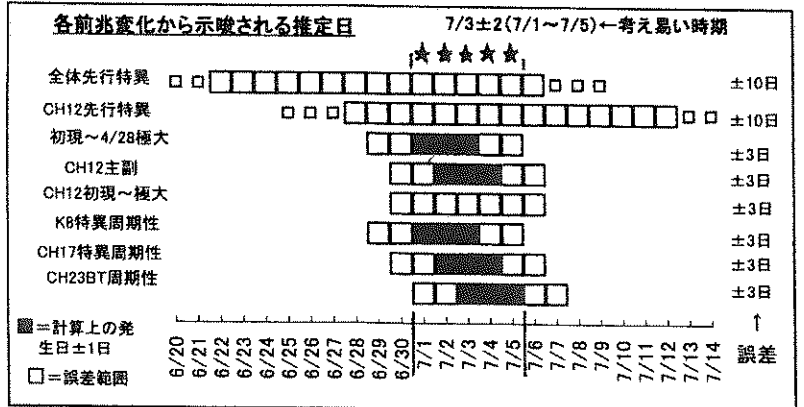
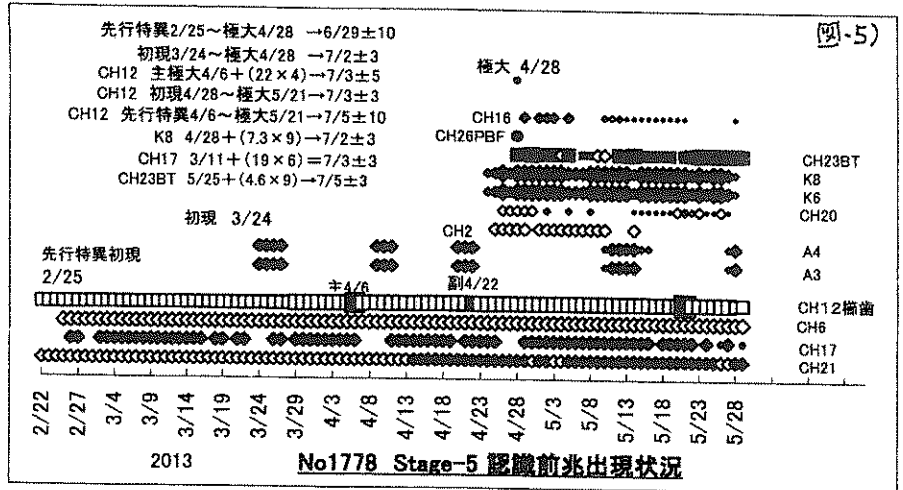


図-7) A = 大枠推定領域

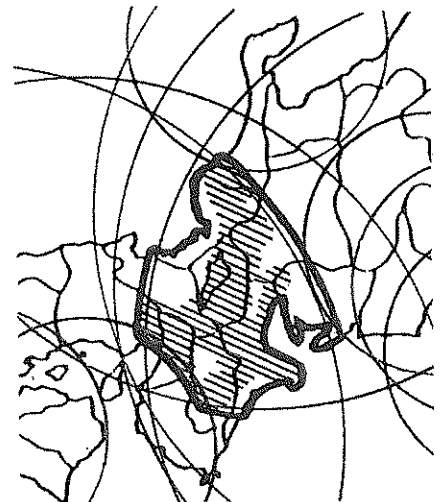


図-7) B = 参考推定領域